
あるスズメの死

水色ペンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あるスズメの死

【著者名】

NO967F

水色ペンキ

【あらすじ】

あるはやしのなかに、ピッピというメスのスズメがすんでいました。ピッピはだんなさんをみつけ、タマゴをうんで、ヒナたちをそだてようとしました。でも、でも。

パタ坊^{ぱつ}、ヒメ、チーチ?
パタ坊、ヒメ、チーチ?

した草^{くさ}にひびくこえなきこえは、子^こをよぶ母スズメのとまどつた
さけびでした。へんじはありません。それもそのはず、この母スズ
メはきのうのひるに、すからおちて、いきたえていたのです。やわ
らかかったハネはパサパサにかわき、くる目^めにはもうあの、つやや
かなひかりはありません。かるくにぎったあしのツメは、みえない
にかをしつかりつかんだみたいに、コチコチにかたまつていまし
た。ピッピ、このスズメのなまえです、ピッピのかおにはアリンこ
がたかつて、そのアリたちとかぜどが、ピッピのハネをさわさわと
ゆすぶつていました。

パタ坊、ヒメ、チーチ?
パタ坊、ヒメ、チーチ?

子スズメたちはどうなつたのでしょうか。それはえいえんにわか
らないのです。もう、えいえんに。

パタ坊、ヒメ、チーチ?
……、?

ピッピはこの春^{はる}、つがいをつくりました。あいてはハンサムなオ
スで、太郎^{たろう}といいました。ピッピと太郎はいつしょにすをかけるば
しょをさがし、まちはずれの林^{はやし}のなかの木^きのひとつに、てごろなさ
けめをみつけました。さけめはたてにながく、うえのほう^にがひろく
あいていて、二わはそのまんなかに、まずかれえだをつめ、そのあ

いだにかれくわをつめこみ、すてきなすを作りました。やがてピッピは五口のタマゴをうみました。

タマゴ、タマゴ、わたしたちのタマゴ、あやこタマゴ、ぶちのあるタマゴ、ふとり、すまつて、じぐりしたタマゴ、はやくヒナにかえれ、

ピッピはうたいながらタマゴをあたためました。そのあいだ、太郎がピッピのためにえさをさがしてきました。太郎がつかれると、「わはしどこをこうたいしました。ピッピは太郎がタマゴをだいているあいだ、どんなうたをうたつているのかしりませんでした。もしかすると、太郎はなにもうたわなかつたかもしません。

タマゴがしずかにふるえだしたのは、ピッピがタマゴをうんできら十一にちめのことでした。やがて四口のタマゴがかえりました。ひとつはずっとタマゴのままでした。ピッピと太郎は四わのヒナに、ピコ丸、まる、ヒメ、チーチ、パタ坊と名づけました。

ヒナたちはちいさくて、あかむけで、やせつぽのからだをしていて、への字にむすんだおおきなくちばしをもっていました。

おなががへつた！ おなががへつたよ！

「わがなきだすと、ほかのヒナもこえをあわせました。チッチ、ピイピイ、たいへんなさわぎです。ピッピと太郎とは、えさをさがしこびたしました。いちにちになんども、ヒナにえさをやらねばなりません。おやじりはたいへんです。

ある日、ピッピはヒナたちが、いつもよりもとおなかをすかせてこむのこもづきました。ピッピはほほえんで、やせしょここました。

おやおや、おまえたち、もうわたしたちのもつてないでめた
りないへりご、おおきくなつてしまつたの？

ヒナたちはこゝにいました。

おとつねがね、おとつねんがね、けわからかえつてこなこの。

ピッピと太郎はめいめい虫むしをつかまえて、ヒナにあげると、すぐ
つぎのえさをせがしにとんでこくのです。なのでひるま、ピッピと
太郎は、すではほとんどかおをあわせません。太郎がかえつてこな
いので、ヒナたちがたべるえさが、こつものさんぶんになつていた
のです。これでは、おなかがくるのもとつぜんです。

ねりがたになつても、太郎はかえつてこませんでした。つるの田
のあせ、ヒナたちがまたおなかをすかせてせわぎだしても、やつぱ
り太郎はかえつてきませんでした。太郎はゞいにこつてしまつた
のです。

ピッピはたつた一わで、ぜんぶのヒナのえさをせがれなくてはな
らなくなりました。

そのよる、ピッピはゆめをみました。まつぐらな森もりのなかを、ピ
ッピが一わでとんでもるゆめです。あると、とおくからヒナのなき
「じえがれ」にまつりました。

「じえがれ」からだらりへ。ピッピせりえのすゑせつづくとんでみました。
くらやみのなかで、大きな木がぼつぼつと田たのまえにつかんでは、う
しろくとせれてこきました。でも、とんでもとんでも、ゞいからこ
えがきこゑしてくるのか、ピッピにはわかりません。ピッピはつかれ
て、こつほんの木のえだにとまりました。

するとじえがれ、したのぼつからなき「じえがれ」にまつりました。

ピッピせんだからとびたつと、じめんにむかってまごつきました。でも、ふしがなことと、おうてもおつとも、なかなかじめんにつきません。やみはふかい穴あなのむつと、そこなじだつたのです。まづくらなやみのおくから、ヒナのじえだけがピイピイ、チャチャイとひびいてくるのでした。

ピッピがじんどにおつてこへと、やがて「い」「い」「う」音おとがきこえてきました。かぜのつよこ田たけ、谷たにまでじんぐりよつなぶきみな音です。ピッピがすすむと、どどりあせじんと大きくなつて、だんだんヒナのじえがねいにくへなつてしまつた。「ハハハハ、チッ、チ、ハハハハ、ピイピイ……。

ピッピせんのじえがどつりかかられじへてくるのか、わからなくなつてしまつました。そこで、もつこあぢかくの木のえだにとまりて、耳みみをすましてきいてみると、

ピッピがとまつたえだはしめつていて、土つちをかぶつたよつてよがれでいました。そのえだは、ななめしたにむかつてのびてきました。

「ハハハハ、チチチ、ハハハハ、ピピピ……。

ピッピせんをよくしゃべるために、えだのわせつけのせつくるることになりました。わつかのせつが、ひくにからりです。ただばくしゃべにやとまがつて、わかんにえだわかれてこます。わせつけのせつづくと、「まだばじんどにほやくなつてこわました。ピッピせんとわくつ」とおつまつました。

チチチ……。

ピッピせんとえだをよくしゃべる、わかんになつてえだにびらんがつました。

チチチ……。

いつのまにか、かぜの音はやんでいました。
ヒナのいえは、まつべりなやみのおへから、ねこやくがこわくを
じれておます。

ビリビリの？

ピッピませ、やみのへによびかけました。

ビリビリの？ おまえたち、ビリビリの？

くんじば、あつません。

あると、ピッピのとまっていたえだが、やまうすむねくしなり
ました。ピッピがおどろいてあたりをみると、いつのまにか、太郎
がとなりにとまつてました。

太郎はいました。

せり、あのー、あやこにいるよ。

でも、ピッピにはみえません。

せり、あやこにいるよ。

ビリ？

せり、あやこ。

ビリ？

太郎はわらいました。

きみにはわからないんだね。じゃあ、ぼくがあの子をむかえにいくから、きみはすにもどつておいで。

そういうと、太郎はとつぜんとびたつて、ましたにむかつておりていきました。きゅうにかるくなつたので、ピッピのとまつていたえだが大きくふるえました。まつからやみに太郎のすがたがしろつぼくつかんでいて、それがどんどんちいさくなつていきました。ふしきなことに、どんなに太郎がとおくべいつても、太郎のすがたはまるでピッピのちかくにいるみたいにはつきりしていて、ピッピには太郎がどれくらいむこうをとんでいるのか、よくわかりませんでした。ピッピは太郎を、じつとみつめっていました。

そのときじこかで、カラスがカアとなきました。あさがくるといつしらせです。

ピッピはきゅうに、すにかえりたくなりました。ちらりとうえのほうをみると、空はまだまづくらでしたが、なんだか、太郎としたにいるヒナのことは、わすれてしまつてもいいようなきがしました。なんでおもつたのかは、ピッピにもわかりませんでした。ピッピがうえをみて、もういちどしたをみると、もう太郎のすがたはわからなくなつていました。そして、いつのまにか、ヒナのなきじえもやんでいたのです。

かえらなくちゃ。

ピッピはえだのうえを、木のみきにむかつてのぼりはじめました。のぼりながら、こんなことにきづきました。ピッピがあるいてい

るのねえだのうえではなくて、じつは木のねつじのうえでした。この木は、くらやみのなかにふかぶかとういていりのでした。そしてねつじからしたこむかってとびふじとは、太郎にはできても、ピッピにはぜつたいにできないのでした。そこは、土のなかだからです。ピッピはせいしょにこのねつじにおひたつたといひまでもぐると、つばさをひろげてまいあがりました。

ピッピはそこで田がさめました。林のなかにあさひがさして、よなかにとおつたきりのしおくが、えだや葉^はつぱからびたびたとしたつていました。

そして、ピヨ丸がすからくなくなつてこました。

ヒナがへつたので、ピッピのえさとりはさらくになりました。ヒナたちはせいしょはやせつぼちでしたが、だんだん、まいにち、すこしづづ、おねぎくなつてこきました。

あるとき、イヌをつれたにんげんが、すのしたをとおりかかりました。イヌはヒナたちのこえをききつけて、したからさかんにほえたてました。でも、イヌは木のうえまではのぼりてこれません。ピッピはすのなかではなく、ちかくの木のうえから、イヌとにんげんをみまもっていました。やがてにんげんはイヌのくびにつけたヒモをぐいぐいひつぱつて、そのままどこかへつてしましました。

またあるとき、大きなノスリがやってきました。ノスリというのは、タカの、ちこさいやつです。スズメにはおそろしい鳥ですが、さいわいピッピたちのすのうえにつごうのいい木のねだがあつて、ノスリの田からすをかくしてくれました。

でも、うんがよかつたのはここの日まででした。

つきの日、いつぴきのイタチが、ちかくの木にあらわれたのです。

イタチがいるよ、きをつけて！

こわいイタチだ、たべられちゃうよー。

森のわかいズズメたちが、ほかのズズメたちにひらせてまわりました。ピッピはそれをきいて、すぐすにもどりました。そしてヒナたちに、じゅかにするようにいつけました。

イタチはね、こわいのよ、さわいだりしたらみつかって、みんなたべられてしめりのよ。だからおまえたけ、きょうはじゅかにしてなさいね。

ピッピがやうこひと、ヒナたちはこつせこつなずきました。

みんながすからみてると、イタチはなんばんかむいつの木にのぼったり、おりたりしていました。えものをさがしてこるのでしうが、うまくみつけられなこつでした。

このはんなら、だいじょうぶ。

ピッピはもうおもひと、イタチがいなくなるのをまつひとこじました。ところが、しばらいたつても、イタチはあまつとおくへこきませんでした。そのうちヒナたちが、おなかをすかせてなきだしました。

おなかがへつた、おなかがへつたよ、
しつ、まだ、イタチがいるのよ。
おなかがへつた、おなかがへつたよ、
しつ、だまつてなさい。
おなかがへつた、

ヒナたちには、イタチのきけんがわからないのです。それに、もう大きくなりはじめていたヒナたちは、おなががすくのもはやいでした。ピッピはしかたなく、ヒナたちにしづかにするよつにいつけて、Hサをさがしにとびたちました。

すこししてから、ピッピはちいさなアオムシをくわえて、すのちかくまでもじつてきました。そしてちかくの木のえだにとまって、あたりをじつくりみまわしました。ピッピがすにはいぬといれを、イタチにみられてはまずいのです。ところが、イタチはも‘へ、どににもみあたりませんでした。

イタチのやつ、どにかくいったのかしら。

そのと煦です。ピッピのあたまのうえで、とつぜん、ちやいろいかけが「ひ」きました。ピッピはめぐらのがおくれました。イタチはピッピよりも、せりにうえのえだにかくれていたのです。

イタチはみがるにえだからとぶと、ピッピのせなかにおそいかかりました。

しまつた！

ピッピせとりをこし、とんでにげようとしたしました。ところが、ピッピがつばさをひるがたしゅんかん、そのつばさに、イタチがかみついたのです。

あつ、

するビニキバが、ピッピのつばさにくこじました。ピッピはイタチからにげようとして、そのままはげしくせばたきました。ところがつばさをくわえられてこるので、ピッピはイタチの田のまえで、

はげしくからだをゆする」としかできません。ピッピの口からアオムシがこぼれて、じめんにむかっておひでこきました。ピッピがあればると、バタバタとものゅうこ音がしました。その音は、もつとすのなかのヒナたちにもきこえたはずです。

はなして！　はなして！

ピッピはなおも、はなたきました。あまりにもはげしくはなしたいので、つばさのなかにあるホネが、ポキリとおれてしまいました。ホネがおれてしまつたので、つばさはきゅうに、へんなふうにまがりました。つばのしょんかん、ピッピのつばさから長いハネがじつそつとぬけおちて、イタチの口からピッピのからだがはなれました。

でも、ピッピはもう、とがいことができなくなつてこました。

ピッピのからだはイチョウの実みたいにくぐくぐるとまわつて、木のうえから、まっすぐじめんにおちました。ぱとっとこう音が、林のなかにこだましました。ピッピはもひつとして田をまわし、おち葉のうえで「ヒビキ」とひびきました。イタチはそれをみて、木のうえからくるくるとじめんにおひできました。そしてイタチがピッピにむかつてあるねだりした、そのときです。

ワン、ワンワン、

けたたましいほえいえがして、いつぴきのイヌが、イタチにむかつてかけてきました。いつだつたか、ピッピのすのしたをとおりかかつたイヌでした。イヌはぐびわから、わわっぽをわつかにしたヒモをひきずつていました。

ワンワン、

イヌにほえたてられてびっくりしたイタチは、ほそながいからだをいつぱいにのばして、林のおぐににげていきました。

「太郎、まで、セヒでとまれ！」

こきをせらしたおじいさんが、イヌのあとをおいかけてきました。おどりいたことに、このイヌも、なまえを太郎というのでした。イヌの太郎はピッピをみつけると、ねれたはなさきでくんくんとにおりをかきました。でも、ピッピはもう、にげる」ともできません。

「とつぜんヒモをぐいぐいひっぱるなんて、しまったやつだなあ」

おじいさんは太郎においつくと、ぶつぶつといながら、ヒモのさきをひろいあげました。そして、おわばのなかにおちているピッピにきがつきました。

「せひあのイタチ、ズズメをとりとしていたのか」

イヌの太郎はおおてがらによりこんで、しつぽをふんふんふりまわしています。

「だめだよ。イタチがとうとうとしていたものを、よじぢりしちゃいけない」

太郎はふまんそでしたが、おじいさんはヒモをひっぱると、太郎をつれてどこかへいつてしましました。

ピッピはこわいイヌも、イタチもいなくなつたので、ひとまずあんしんしました。

でも、ピッピはもう、木のうえへは、すのうえまでは、もどれな

いからだになつていたのです。

どひしょりへ、すにもどりなきや。

どひしょりへ、ヒサがないと、ヒナたちがしんでしまひわ。

木のすりとひべのほつから、ヒナたちのせべすりがせりへてきました。ピッピはなんとか木のしたまではつてこきましたが、うえにあがることもできません。

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パタ坊、ヒメ、チーチ？

ピィペイ、チッチ、ピィペイ、チッチ、

ピッピのよびかけも、ヒナたちもどこでいるのかわかりません。

パタ坊、ヒメ、チーチ？

パタ坊、ヒメ、チーチ？

どひしょりへ。
どひしょりへ。

どひしょりも、なかつたのです。

「おはなしは、さじしょのところくもどります。

ピッピはそのまま木のしたでよわって、よなかの、くつせがひえ
じんだとれ」、しんでしまつたのです。

イタチは、ピッピのしがいをとっこぼ、もじつてきました。
ヒナたちがどひつたのかは、だれにもわかりません。

「おはなしは、さじしょのところくもどります。

ただ、この林のなかには、ヒナたちをよぶピッピのこえが、かぜにまぎれて、しづらぐのあいだ、こだましていました。

パタ坊、ヒメ、チーチ?
パタ坊、ヒメ、チーチ?

……、?

でも、そのこえは、だれにもさせませんでした。

＜おわり＞

(後書き)

「これは、あとがきです。

あなたは、ピッピをたすけようとしなかつたおじいさんを、ひどいひとだとおもいますか。

しんでしまつたピッピを、かわいそうだとおもいますか。
ピッピと太郎のヒナたちを、かわいそうだとおもいますか。

おなかをすかせたイタチを、かわいそうだとおもいますか。ひどいやつだとおもいますか。

ピッピがじめんにおつことしたアオムシを、かわいそうだとおもいますか。なんともおもいませんか。

こたえは、ありませんです。なけれど、さがしてみよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0967f/>

あるスズメの死

2010年10月9日01時19分発行